

大賞 なにみうのさん (福岡県 小学3年)

**SDGs:Unknown**

「ねえ、このきれいな、何？」

子どもたちがキラキラした目で、宝物を運ぶように何かを持ってきた。

「なにかしら？なにを見つけてきたの？」

と私はほほえむ。小さな手の中に入っていたのは、私たちにはなじみの深かった、17の色が輪になった、あのバッジだ。

今は2050年。あのころの私たちが心配していたBeyond SDGsの世界。すべての生物が、ずっと地球とともに暮らしていけるための17の目標SDGsは2030年までに見事達成された。これにはインターネットが一役も二役もかっている。興味を持った情報は国境をこえて調べられ、SNSでは手軽に情報の発信、かく散、共有ができる。SOSも出しやすい。世界中が自分の「ご近所」になり、世界中の問題が「自分事」になった。三人寄れば文殊の知恵とはよく言ったものだ。約80億人の知恵を集約させたこの数年の進歩はめざましかった。もちろん、以前から言われていたじゅんかん型社会、脱炭素社会の実現は言うまでもない。発電用の風車がまわっているのはもう日常の光景。今はさらに風車の羽根にうすがたの太陽光パネルがうめこまれ、風力と太陽光発電を合わせてできるようになった。現在はこの「風光発電」が地球上の電気の大半をになっている。発展途上国のインフラ整備は、新たに設置された「地球環境機関 (EEO: Earth Environment Organization)」が責任をもって行った。今は世界中の人がインターネットにアクセスできる。水のろ過や災害に強い家づくりの技術はインターネット上で情報共有され、実生活に取り入れられている。昔からある生活の知恵も世界中に広まった。夏のもう暑の中、すだれやよしず、打ち水といった日本の文化が「SNS映えする」のをきっかけに世界中で大流行。ほかにも私がうれしかったのは、日本語の「いただきます」や「ごちそうさま」が世界共通の言葉になったことだ。食べ物に感しゃする気持ちが広まり、フードロスも大きくへった。フードロスが出てしまいそうな場合にはSNSで呼びかけ、EEOが必要なものを必要な場所に届けていく。世界は大き

く、そして身近なものにかわった。

「SDGs」。17のゴールを達成した後に生まれたこの子たちにとって、この言葉はもう教科書に出てくるだけのものになった。子どもたちがバッジと一緒にもってきた、当時小学1年生の私が作った「小学生にもできるSDGs」のポスターを懐かしくながめる。必死で取り組んでいた自分の子供時代。これが実を結んだ世界に、私は今生きているのだ。

「ママ、はやく！おくれちゃう！」

娘の声が聞こえる。今日は娘の8歳のたん生日。特別な日に木を植えることはもう世界中の常識。地球上には緑がふえ、砂ばくの緑化もすすんできた。

「今年は、なんの木にするの？」

「桜の木。クラスのみんなで桜並木を作る約束をしてるの。それにママの誕生日のころに咲くから。」

「ぼくはね、来年やぎのなる木を植えるんだ。アルガンっていう木でヤギがのぼって葉っぱを食べるんだ。先週『ちきゅう交流』の授業でモロッコの子たちが言ってた！」

そうやって子供たちはむじゃきに笑っている。

彼らの世代は知らない。身近な常識やシステムを作るために私たちがどんなに苦労したかを。でもそれでいいのだ。もはや気にしていないほど自然に、この時代の子供たちは楽しそうに地球と共存している。私たちの世代の目指していたSDGsが見事達成された結果が、彼らの笑顔なのだ。

17色。EEOのマークの元になったこの色の意味を、彼らは知らない。少し色あせたそのバッジを、私はほこらしく思いながら宝石箱にしまい、そっとふたを閉じた。